

# 大学生の地図リテラシーと情報リテラシーの相関

—— デジタルマップの有効性に関する考察 ——

林 香織\*

## 要 約

本研究では、大学生の地図リテラシーの高低を調査によって明らかにする一方、彼らの生活に欠かせないモバイルを中心とするメディア環境に着目し、情報リテラシーと地図リテラシーの相関から、近年増えつつあるデジタルマップの有効性の検証を試みた。その結果、「モバイルを使いこなしている」実感が高い人ほど、地図リテラシーが高いと思いつている傾向にあり、双方のリテラシーにはある程度の相関があることが確認された。しかし実際には、時間や距離で空間を認識する能力は希薄で、道に迷いやすい傾向にある。このように、学生のリテラシーに関する自己評価は曖昧で疑問が残るため、今後はどのような客観的指標で「リテラシー」を計測するかの検討が望まれる。

**キーワード:** 大学生, メディア利用, 情報リテラシー, 地図リテラシー

## はじめに

本稿は、大学生にとってのメディア環境を整理し、地図リテラシーを情報リテラシーの相関関係を考察するものである。

近年筆者が行ってきた、「流山オープンガーデン」に関する調査結果によると、訪問者の4割強は、地図リテラシーが低く、地図を持っていてもうまく読みこなせないため、目的地に辿り着けず、それが原因でイベントそのものの満足度が低くなっている(林, 2013)。もっとも、「流山オープンガーデン」の訪問者の多くは、50～70歳代の中老年層に集中している。こうした地図リテラシーに関する若年層における傾向は、中老年層のものとは異なるのだろうか。

本研究では、大学生の地図リテラシーの高低を調査によって明らかにする一方、彼らの生活に欠かせないモバイルを中心とするメディア環境に着

目し、情報リテラシーと地図リテラシーの相関から、近年増えつつあるデジタルマップの有効性の検証を試みるものである。

## 1. 研究背景

株式会社ゼンリンの「地図利用実態調査2014」<sup>(1)</sup>によると、地図を利用する媒体は過去2年に比べ、徐々にモバイルへ移行している。特に、10～20歳代の若年世代ではモバイル端末からの地図へのアクセスが56.6%と半数以上を占めており、他の世代と比べて「地図は単なる道具」であって「地図はそれ自体を楽しむもの」ではないと考えているのだという。また同調査によると、1年以内に首都圏に行ったことがある人の内、2割の人に「迷った」経験があり、「迷った」人の特徴として①女性、②若年世代、③スマートフォン所有者が挙げられている。

一方、大学生のスマートフォン利用者は、かなり多い。現に2013年に本学学生を対象に行った「メディア利用実態調査」では、スマートフォン利用者が91.8%となっており、その利用者の96.8

2015年11月30日受付

\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科専任講師  
社会学, コミュニケーション論

%は、Lineを利用するなど何らかのソーシャルネットワークサービス（以下、SNS）を利用していた（林，2014）。彼らの生活に、スマートフォンを中心とするモバイルツールは必要不可欠であり、あたかもそれを使いこなす、すなわち「スマートフォンリテラシー」能力が備わっているように見える。

だが、例えば「ゼミナールの合宿先を話し合っ  
て決めなさい」などの課題を与えると、スマートフォンは無用の長物と化す。何を検索すればよいか、わからないのだという。誰かが、「〇〇はどう？」と知っている地名を挙げても、「それはどこ？」「ここからどれくらい離れているの？」「どうやって行くの？」などと矢継ぎ早に質問が他の学生から飛ぶ。交通費にいくらかけるか、移動時間がどれくらいがいいかなどを話し合っ  
て、それに見合う目的地を設定すればおのずと答えは見えてくるはずだが、結局何も決まらないまま、無駄に時間が過ぎてしまう。検索すれば答えをくれるツールを手に入れているのに、検索すべきことがわからない状況に陥ることは「情報リテラシー」が高いとは言えない。だが、問題の本質は「情報リテラシー」の手前にある、「目的地をどう定めるか」というところに存在している。

目的地を定めるためには、ある程度広範な概要を知識として持つておく必要がある。先に挙げた「地図利用実態調査」の結果にもあるように、モバイルの地図の利用が多い若年世代において、この“ある程度広範”な地図を頭に思い描きにくくなっているのではないだろうか。

そこで本研究では、以下の仮説をたて、検証していくこととした。

仮説：地図リテラシーの高さと、情報リテラシーの高さは比例する。

## 2. 先行研究の整理

日本心理学会のwebサイトのQ & Aに「なぜ方向オンチの人とそうでない人がいるのか？」という質問が寄せられ、心理学者の新垣紀子氏は、①空間能力説、②知識の違い説（サーベイマップ

的知識／ルートマップ的知識）、③問題解決法略説、④社会的ラベリング説の4つの観点から解答を試みている<sup>(2)</sup>。地図の読み方、地図リテラシーに関する研究は、空間認識という観点から、人文地理学、心理学、建築学といった領域での成果が多くみられる。

前掲の「②知識の違い説」におけるサーベイマップ的知識とは、俯瞰的に事物の空間的配置を思い浮かべることに對し、ルートマップ的知識とは移動経路を思い浮かべる際、自分を中心に道筋を辿っていく方法をとる思考を指す（Shemyakin, 1962）。あまりにも有名な研究成果であるが、中村は発達過程においてどのようにサーベイマップとルートマップが獲得されるのかに着目し、中学生、大学生を被験者にした実験から「集積されたルートマップ」と「サーベイマップ」の2種類の空間イメージが反映され、「サーベイマップ全体像」が構築されていくことを明らかにした（中村，2006）。確かに、サーベイマップとルートマップは簡単に切り離せるものではなく、個の積み重ねが全体を為すという考え方は道理にかなっている。

一方、サーベイマップ的知識と方向感覚、また言語能力には関連性があり、方向感覚の良い者にとって、「方向・距離に関する知識の符号化には言語および空間ワーキングメモリが重要な役割りを果たしている」のだという（温・石川・佐藤，2011）。確かに地図には様々な情報が記載されており、その意味で“地図”は、方向や距離、記号や文字などによる視覚情報を処理し、空間イメージを想起させるツールである、と定義することができる。人間のコミュニケーションは、解釈の度合いによって獲得できる情報に格差が存在するものだが、コミュニケーションと“地図”は、解釈＝処理できる情報量によって、知識の蓄積に差が生じる点において共通している。であるなら、地図をどれくらい読みこなせるかという能力と、情報の解釈には大きな関連性があると考えることができる。

また松井は、大学生の地形地図問題の解答過程を分析し、「地図に明示されない情報を推理する

際には、問題文を解釈してイメージ化したり、概念に翻訳するなどの認知的処理が介在する」と述べている(松井, 2012)。この研究においても、解釈からイメージされることの重要性が説かれている。地図とは異なるが、「グラフや図表の読み取り」に着目し、大学生の調査を行った持元によると①抽象的な数値データに基づくグラフを総合的に読み取るのが苦手、②複雑なグラフの読み取りを誤るケースが相対的に多い傾向、③グラフからの読み取り情報量が著しく少なかったり、グラフを総合的に読もうとした形跡が全般的に弱い、などの傾向を見出している(持元, 2013)。やはり、どう読み解くかという問題よりは、むしろ何を読み取ることができるか、という情報量が、「読める／読めない」を規程している要因であることがわかる。

一方、若林は「空間認知の情報源として地図を捉えた場合、対象となる空間の規模が大きいほど、その役割は重要になるが、地図の表現によってもその影響は異なる」と述べている(若林, 2008)。地図の表現とは、この場合、デザインなども含まれるが、多くは紙地図か、デジタルかといった媒体の問題として論が展開されている。更に興味深いのは、「パソコン(以下、PC)の利用はデジタル地図だけでなく、汎用地図の利用とも関連性がある」という点だ(若林, 2003, 竹内, 2003)。また、「方向感覚の高い人は汎用地図をよく利用する」ことも確認されている(同掲)。つまり、汎用地図をよく利用する人はPCの利用が活発で、方向感覚も高い人が多いということである。これは、インターネット上にあふれる情報の中、適切なものを探し解釈する能力と、地図を読む力に関連がある、ということの意味している。このように、情報を解釈するという意味の情報リテラシーと、地図の中の情報を読み取るという意味の地図リテラシー、両者に相関があることは先行研究で確認されているといえる。

しかし、「地図利用実態調査2015」<sup>(3)</sup>によると、1年以内に地図を利用した人の内、68.9%はPC用インターネット地図を、46.3%はモバイル用インターネット地図を、40.1%はスマートフォン用

インターネット地図を利用したという。モバイル、スマートフォン用の地図の利用率が年々増加するのに対し、PC用インターネット地図の利用は減少傾向にある。特に、移動する時に利用する地図について、若年世代では、デジタルマップを利用するのに対し、中高年世代では、紙や冊子などのアナログマップを利用していることが明らかになっている。総務省「平成26年通信利用動向調査」<sup>(4)</sup>によると、30歳代以下の世代のスマートフォン利用が顕著になり、PC利用率が低くなってきている。実際、平成25年の調査結果と比べ、PC保有率は81.7%から78.0%に若干の減少がみられた。PC利用と地図リテラシーに相関があるという先行研究に照らし合わせれば、このような傾向は非常に危険である。一方で、モバイル利用と地図リテラシーの相関をみる研究はまだ少なく、この分野は、学術的なデータを蓄積する意味で、多様な学問分野からの調査を試みる段階にある学際的領域といえる。

### 3. 調査概要

先行研究を踏まえ、質問紙を作成し、本学学生へのアンケート調査を行った。

#### 3.1 調査対象者、調査方法

- a. 調査対象母集団：メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科1, 2年生
- b. 標本数：有効回答数 141
- c. 調査時期：2015.11.25(水)2限 メディアコミュニケーション論(1年生必修科目)  
2015.11.27(金)2限 マス・コミュニケーション史(2年生必修科目)
- d. 調査方法：自己記入式アンケート調査

#### 3.2 質問事項

属性(性別、学年、睡眠時間、運転免許の有無)、利用端末の種類、モバイル利用歴、モバイルメールの相手数、利用時間、SNSの利用有無、PC利用歴、PC利用時間、インターネット接続時間、PCメールの相手数、PCでのSNS利用有無、

情報行動の経験、地図利用の経験、生活環境の認識

## 4. 調査結果

### 4.1 属性の整理

まず初めに、属性を整理しておくとして男性 44.7%、女性 55.3%、学年は 1 年生 57.4%、2 年生 39.7%、3 年生 1.4%、4 年生 1.4% となっている。それぞれマス・コミュニケーション学科の必修科目において調査を行ったため、学科構成と一致しており、マス・コミュニケーション学科 1、2 年生の代表的見地といえるデータ構造をしていることを断っておく。

また、情報リテラシー及び地図リテラシーに関連した説明変数として、睡眠時間や運転免許証の有無などを準備したが、結果として相関関係がなかったため、ここでは割愛する（詳しい調査内容については、本稿末尾の単純集計参照）。

### 4.2 情報リテラシー関連項目の整理

まず、情報に関する経験を 5 項目挙げ、「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」までの 4 段階で答えてもらった結果を図 1 に示した（ただし、図 1 における「当てはまる」は「とても当てはまる」と「まあ当てはまる」を足した割合で表記している）。8 割を超える学生が「インターネットで検索するのは得意」かつ「知りた

い情報をすぐに探すことができる」と回答している。レポート作成や卒業論文執筆時における検索能力を見ていると、とても得意ようには見えないが、自己認識上「得意」なことであることがみてとれる。

「レポートを書く時にわからないことは Wikipedia で調べる」には 43.4% の学生が、当てはまると回答している。教育的には、Wikipedia がインターネット上の集合知であることを理解した上で利用し、Wikipedia を起点に、別のページや参考文献を確認に欲しいものだが、半数弱の学生が、ここを頼りにしていることがわかる。モバイルと PC の関連については、「使いこなし」という観点で自己評価をしてもらった結果、モバイルの方が PC よりも使いこなせているという実感が強いことがわかった。

また、Wikipedia の利用には性差がみられ ( $p < .05$ ) 女性よりも男性の方が利用する頻度が高い。更に、PC を利用しない、もしくは利用時間が短い学生ほど Wikipedia を利用する傾向にある ( $p < .01$ )。

なお、今回の調査において、PC の利用開始時期はモバイルのそれより早いものに対し、1 日の利用時間は圧倒的に PC の方が短い。Twitter や Facebook のような SNS もモバイル中心で、PC からのアクセスは Twitter 27.0%、Facebook 5.7% と極端に低い。使いこなせないから移行するのか、モバイルに頼るあまり PC が使いこなせなく

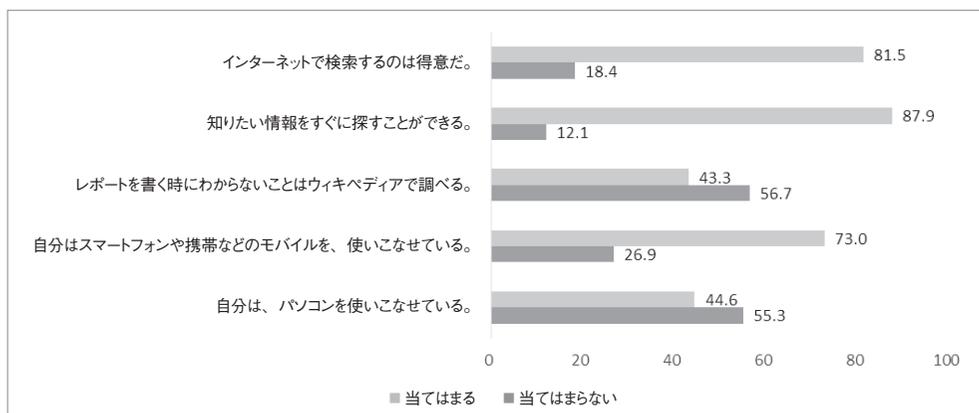


図 1 情報リテラシー関連項目 (単位 = % n = 141)

なるのか、因果関係ははかれぬものの、モバイルが基軸をなし、PCはそれを補完するというよりも、もはや単なるオマケの存在になっているメディア環境が明らかになった。これに関連し、「PCを使いこなしている」と強く実感する人ほど、PC利用時間が長いが ( $p < .05$ )、モバイルを使いこなす実感と利用時間に相関はみられない。よって、情報リテラシーの規程要因はPCの利用時間や使いこなし能力であるが、モバイルは規程要因とはなりえないことが明らかになった。

### 4.3 地図リテラシー関連項目の整理

次に、地図に関する経験を10項目挙げ、情報に関する項目と同じように4段階で評価してもらった結果を図2示した。

これによると、8割を超える学生が、「最寄駅から自宅までの簡単な地図を書くことができる」と回答している。ただし「地図を、自分の進行方向に回した方が使いやすい」と回答した学生も81.6%いることから、自宅と駅の位置を固定し、その間のルート構築する規程再生型の地図を書けるかどうかはいささか怪しいところがある。今後は作図結果を検討するなど、「地図を書ける」という客観的データの蓄積が必要になる。

また、7割を超える学生はカーナビゲーション(以下、カーナビ)やモバイルの地図を不便とは感じていない。しかし地図は紙になっているの方が使いやすいと回答している学生も66.0%存在して

いる。これらの結果から考察できるのは、ルートマップ的に地図を用いている学生の実態である。カーナビやモバイルでは、拡大縮尺のみならず、ノースアップ、ヘッドアップなどが自由に選択できる。今回の調査結果では、地図を回す、進行方向に向けるヘッドアップなど、自分を中心にした表示形式であるデバイスへの抵抗感の少なさが見てとれ、ルートマップ的知識を持ち合わせていることがわかった。こうした抵抗感の少なさやルートマップ的知識の獲得状況は、今後ますます増えていくデジタルマップとの相性がいいものだと考えられる。その意味で、デジタルマップの可能性は明るい。だが、「目的地を決める」という地図の利用ができるかどうかは、距離や時間といった空間をどのようにとらえるのかを検討する必要があると考えられる。

更に、サーベイマップ的知識が少ないと考えられる要因は他にもある。地点AからBまでどれくらいの距離感、かつ徒歩で何分かかかるなどの距離や時間の概念について、わかりにくさを感じている学生が半数以上いた。地図の縮尺度や、徒歩15分で進む距離はおよそ1kmといった。一般常識を獲得していれば、そこから推察することは可能であるはずだが、多くの学生はわかりにくさを訴えている。しかし地図を見て迷うという学生は、47.5%、迷わない学生50.3%、とおよそ半々となっている。実に興味深いことに、地点AからBまで何分かかかるか、どれくらいの距離か、そして

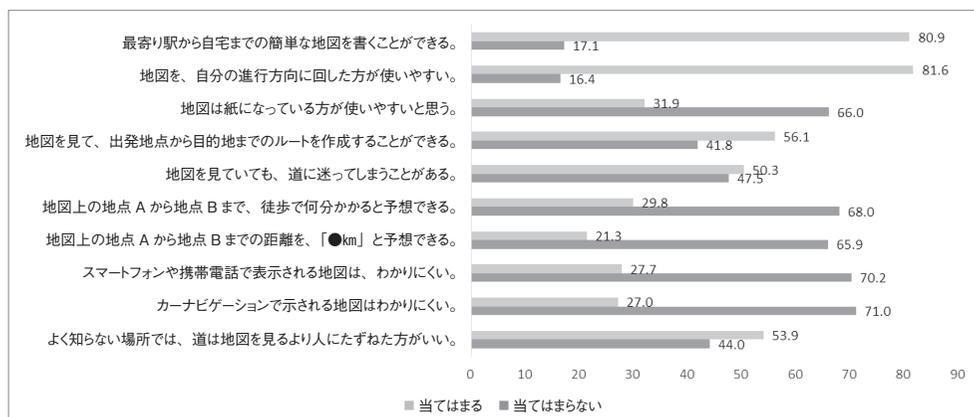


図2 地図リテラシー関連項目 (単位=% n = 141)

地図を見ても道に迷うか、という3つの項目には性差が見てとれ（すべて  $p < .01$ ）、女性は男性よりも、時間も距離もわからず道に迷うと回答している割合が高くなっていった。一般的に「女性は地図が読めない」という文脈が語られることが多いが、空間認識の先行研究の中では、これは疑わしい説だとされている（若林, 2008）。そのような言説が流布される中で、社会的に「私は地図が読めないのだ」と考えるようになっていく、社会的ラベリングの結果といえなくもない。事実、男性の中にも時間的、距離的概念で地図をとらえにくいと訴えている割合が高い。むしろ彼らは、そうした情報、つまりルート全体に関するサーベイ情報を地図上から読み取っていないのに、迷わずに済んでいるのは、どういう理屈なのか解明しなければならないが、今後の検討課題としたい。

## 5. 分析

調査結果の概要から導きだした、情報と地図のそれぞれに関するリテラシーを元に、本節では仮説「地図リテラシーの高さと、情報リテラシーの高さは比例する」の検証を試みる。

それぞれの項目同士のクロス集計を行ったところ、いくつかの項目に興味深い結果が現れた。まず、「知りたい情報を探することができる」に強く同意した学生ほど、「地図を見てルートを作成することができる」と回答する割合が高い（ $p < .05$ ）。ただし、ルートを作成することに関する自己評価は過大な部分が存在している。本調査では、学生の行動範囲を確認するため、「先週1週間で、家から最も遠い場所まで何分かかったか」、更に「その場所は、家から何kmくらい離れているか、わからなければ『×』と記入」という設問を組み込んだ。交通手段は不明だが、最も遠い外出先の平均は78.62分であり、電車で考えると、千葉県流山市の大学から東京都内に出る、およそ30km圏内くらいの移動距離だと考えられる。移動時間が短い人ほど「地図をみても道に迷う」傾向にあること（ $p < .05$ ）も確認された。しかし、距離感をつかんでいる人は、全体の2割にすぎず、

79.4%は「距離はわからない」と回答した。この設問項目と、前掲の「ルートを思い描くことができるか」をクロス集計したところ、距離がわからない人の方が「ルートを思い描くことができる」と回答する割合が高くなっていった（ $p < .001$ ）。距離がわからない人は、「地点AからBまでの距離」「地点AからBまでかかる時間」についても予想できると回答する割合が高く（ $p < .001$ ）、時間や距離の概念が希薄であることが読み取れる。また自己評価による設問項目の調査方法については今後の課題である。だが言えるのは、移動時間や距離といった日頃の行動範囲、つまり生活環境は、地図リテラシーと相関があり、生活環境が広範な学生ほど、地図リテラシーが高い可能性があることは確認できた。

一方、「モバイルを使いこなしている」という実感を強く持っている人ほど「地点AからBまでの距離」について予想できると回答する割合が高い（ $p < .01$ ）。逆に、「PCを使いこなしている」実感がない人ほど、「よく知らない場所では、地図より人にきいたほうがいい」という依頼心を強く持っていることも明らかになった（ $p < .001$ ）。

しかし、「モバイルを使いこなしている」、「PCを使いこなしている」という彼らの感覚は、あやふやなものである。実際、大学生の情報リテラシーについて、情報工学系の学生でさえ、パソコンやインターネットの原理や仕組みについて知る機会もなく、興味を持たないままそれを利用する傾向にあることや（相良・中沢, 2013）、PCを使えると言っても、WordやExcelなどのよく利用するソフト以外の操作はあまりできず、更に「ブラウザ」という言葉を知らないままインターネットを利用するなどの行動がみられるなどの報告（飯島・山本・井内, 2011）が散見される。また、本学においては入学者全員にPCを貸与し、「情報リテラシー」を必修として課している。小澤・野田は、他大学における同じ「情報リテラシー」という講義の中で、Word・Excel・PowerPoint・メディア文化の4項目を「メディア活用能力」と規程し、教育的効果を調査によって検証したところ、『「メディア活用能力（自己評価）」の全体的

傾向がプラスにシフト」したため、教育的効果があったことを確認している（小澤・野田，2013）。だが、先行研究に照らし合わせれば、操作のレベルや、仕組みの理解を客観的に判断するものではないため、自己評価は「情報リテラシー」の分野に関して言えば非常に怪しいことがわかる。実際、「情報リテラシー」で「優」をとっている学生でも、卒業論文執筆時に「ページ数の入れ方がわからない」「目次はどうやって作るのですか」などと質問してくる傾向にある。それこそ、インターネットで検索すれば、簡単に答えがわかるのだが、その一瞬の手間を惜しむ。「やればできる」という自信が加味されていると考えられるが、情報に関するリテラシーも、地図に関するリテラシーも今回の調査について言えば、非常に曖昧かつ怪しいものであると言わざるを得ない。

よって、今回の調査結果からは、「モバイルを使いこなしている」実感が高い人ほど、地図リテラシーが高いと思込んでいる傾向にあるが、実際は、時間や距離で空間を認識する能力は希薄で、道に迷いやすい傾向にあることが見て取れる。本研究の仮説は一部が指示されたものの、自己評価によるリテラシーの計測には限界があることが見てとれた。

## まとめと今後の展望

本研究で明らかになったのは以下の点である。

1. 「情報リテラシー」を規程する要因はPCの利用時間や使いこなし能力である。モバイルの利用時間や使いこなし能力は、知りたい情報に辿りつく能力といった意味の「情報リテラシー」を規程する要因とはなりえない。

2. 学生の「地図リテラシー」は自分を中心にした表示形式のデバイスへの抵抗感の少なさから、ルートマップ的知識を持ち合わせている傾向にある。

3. 移動時間や距離といった日常の行動範囲＝生活環境は、「地図リテラシー」と相関があり、生活環境が広範な学生ほど、地図リテラシーは高い傾向にある。

4. 「モバイルを使いこなしている」実感が高い人ほど、地図リテラシーが高いと思込んでいる傾向にあるが、実際は、時間や距離で空間を認識する能力は希薄で、道に迷いやすい傾向にある。

こうした学生の傾向は、目的地を決めるといったデジタルマップの利用方法とは必ずしも符号しないが、目的地までの道のりが示されるといった意味では親和性が高いと考えられる。地図上に示された情報から、時間や距離感を読み取る能力は低いものの、画面上に示された道のり通りに進む、ある種の再現能力を計測することによって、デジタルマップの可能性をさらに追及できることがわかった。

一方、学生の自己評価に若干疑問が残る調査設計であることが確認されたため、今後はどのような客観的指標で「リテラシー」を計測するかの検討が望まれる。

## 参考文献

- Shemyakin, F. N, 1962, Orientation in space in B. G. Ananyev et al. (Eds.), Psychologica science in the USSR.1(1), Washinton, D. C : Office of Technical Reports, 186-225
- 飯島香織・山本誠次郎・井内善臣, 2011, 大学生の情報リテラシーに関する調査研究—情報活用能力（文部科学省）と情報フルーエンシー（アメリカ学術研究会議）の視点から—, 神戸山手大学紀要 13, 1-11
- 温文・石川徹・佐藤隆夫, 2011, サーベイマップ的空間知識の獲得におけるワーキングメモリの役割, 人間・環境学会誌 14(1), 27
- 小澤孝人・野田恵子, 2013, 大学生のメディア利用・ライフスタイル・メディア教育の効果について—情報リテラシー教育の現場からの調査報告—, 東海大学観光学部紀要 4,31-49
- 竹内謙彰, 2003, 大学生の地図利用行動と感情, 経験およびナビゲーション・スキルとの関連, 地図 Vol.41(4), 37-47
- 相良純一・中沢実, 2013, 大学生の情報リテラシーに対する意識と知識に関する調査について, 情報処理学会研究報告, 1-7
- 中村奈良江, 2006, 空間イメージの再考—サーヴェイ・マップの特徴の見直しから—, 西南学院大学人間科学論集 1(2), 25-43
- 林香織, 2013, 紙地図の掲載に適した環境情報の検討—流山オープンガーデン訪問者のメディア利用の視点から—, Informati11,47-52
- 林香織, 2014, SNS利用者にとっての「世間」に関する一考察—大学生の「見られる」意識を事例に—, 江戸川大学紀要 24, 275-283
- 松井優理・若林芳樹, 地形図読図問題の解答過程における空間的思考, 2012, 人文地理学会大会一般研究発表資料

料集, 70-71

持元江津子, 2013, 大学生のグラフを読む力にみるグラフリテラシーと情報リテラシーの現状についての一考察, 天理大学人間学部総合教育センター紀要 12, 91-96  
若林芳樹, 2003, 大学生の地図利用パターンとその個人差の既定因, 地図 Vol.41(1), 26-31  
若林芳樹, 2008, 地理空間の認知における地図の役割, 日本物理学会誌 15(1), 38-50

の男女を対象にしたインターネット調査。事前調査 20,754 サンプル、本調査 1,085 サンプルを回収。調査時期 2014.3.7 ~ 3.11

- (2) 日本心理学会 <http://www.psych.or.jp/> (2015.11.29)  
(3) 株式会社ゼンリン <http://www.zenrin.co.jp/news/150415.html> (2015.11.28) 全国の 18 ~ 69 歳の男女を対象にしたインターネット調査。スクリーニング調査 20,000 サンプル、本調査 1,000 サンプルを回収。調査時期 2015.2.23 ~ 2.24  
(4) 総務省 [http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/150717\\_1.pdf](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/150717_1.pdf) (2015.11.28)

《注》

- (1) 株式会社ゼンリン <http://www.zenrin.co.jp/news/140415.html> (2015.11.28) 全国の 18 ~ 69 歳

情報リテラシーと地図に関する調査 (単純集計) ※表示単位: %

★調査分析に必要な、あなた自身のことを教えてください。

1 性別を教えてください

n = 141 na = 0.0

男性	44.7	女性	55.3
----	------	----	------

2 学年を教えてください

n = 141 na = 0.0

1年生	57.4	2年生	39.7	3年生	1.4	4年生	1.4
-----	------	-----	------	-----	-----	-----	-----

3 1日の平均睡眠時間を、平日・休日に分けて教えてください。

n = 141 na = 0.0

平日の平均睡眠時間	(平均 5.94 時間) (中央値 6.00 時間)	休日の平均睡眠時間	(平均 7.99 時間) (中央値 8.00 時間)
-----------	-------------------------------	-----------	-------------------------------

4 あなたは「運転免許証」を持っていますか？また持っている人は、週のうち何回くらい運転するか教えてください。

n = 141 na = 0.0

運転免許を持っている	28.4	運転免許は持っていない	71.6
週に (平均 2.13 / 中央値 1.00) 回くらい運転する			
週に 1 回目運転しない	35.0		

★あなたが日頃どのように情報を手に入れているのかについて、教えてください。

5 あなたのスマートフォンや携帯電話の利用状況を教えてください。

n = 141

①持っている端末	スマートフォン	96.5	携帯電話	3.5	持っていない	0.0	na = 0.0		
②モバイル利用歴	(平均 13.20 / 中央値 14.00) 歳くらいから携帯電話やスマートフォンを使っていた						na = 1.4		
③メールの相手数	(平均 6.27 / 中央値 3.00) 人くらい						na = 2.1		
④モバイル端末利用時間	1 日平均 (平均 5.70 / 中央値 5.00) 時間くらい携帯電話やスマートフォンを利用する						na = 4.3		
⑤SNS の利用有無	Line	94.3	Twitter	77.3	Facebook	30.5	その他	26.2	na = 1.4

6 あなたのパソコン (以下、PC) 利用状況を教えてください。

n = 141

①PC 利用歴	(平均 12.33 / 中央値 12.00) 歳くらいから PC を使っていた						na = 2.1				
②PC 利用時間	1 日平均 (平均 2.23 / 中央値 2.00) 時間くらいパソコンを利用する						na = 1.4				
③ネット接続時間	1 日平均 (平均 1.73 / 中央値 1.00) 時間くらい PC でインターネットをする						na = 1.4				
④PC メール の相手数	(平均 1.20 / 中央値 0.0) 人くらい / 利用しない						78.7	na = 1.4			
⑤PC での SNS 利用	Line	25.5	Twitter	27.0	Facebook	5.7	その他	14.2	利用しない	53.9	na = 1.4

7 あなたは①～⑤のようなことについて、自分にあてはまると思えますか。それぞれについて、1つずつ○をつけてください (○はそれぞれ1つずつ)。

n = 141 na = 0.0

	とても当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
① インターネットで検索するのは得意だ。	26.2	55.3	18.4	0.0
② 知りたい情報をすぐに探すことができる。	31.2	56.7	12.1	0.0
③ レポートを書く時にわからないことはウィキペディアで調べる。	12.1	31.2	39.7	17.0
④ 自分はスマートフォンや携帯などのモバイルを、使いこなせている。	16.3	56.7	23.4	3.5
⑤ 自分は、パソコンを使いこなせている。	10.6	34.0	44.0	11.3

★あなたの地図の使い方と、生活環境について教えてください。

8 あなたは①～⑩のようなことについて、自分にあてはまると思えますか。それぞれについて、1つずつ○をつけてください (○はそれぞれ1つずつ)。

n = 141 na = 2.1

	とても当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
① 最寄り駅から自宅までの簡単な地図を書くことができる。	46.1	34.8	12.8	4.3
② 地図を、自分の進行方向に回した方が使いやすい。	45.4	36.2	12.1	4.3
③ 地図を見て、出発地点 (もしくは現在地) から目的地までのルートを作成することができる。	20.6	35.5	31.9	9.9
④ 地図を見ているでも、道に迷ってしまうことがある。	19.1	31.2	32.6	14.9
⑤ 地図上の地点 A から地点 B まで、徒歩で何分かかると予想できる。	7.8	22.0	48.9	19.1
⑥ 地図上の地点 A から地点 B までの距離を、「●km」と予想できる。	5.0	16.3	46.8	19.1
⑦ 地図は紙になっている方が使いやすいと思う。	7.8	24.1	45.4	20.6
⑧ スマートフォンや携帯電話で表示される地図は、わかりにくい。	5.7	22.0	44.7	25.5
⑨ カーナビゲーションで示される地図はわかりにくい。	4.3	22.7	50.4	20.6
⑩ よく知らない場所では、道は地図を見るより人にたずねた方がいい。	22.7	31.2	30.5	13.5

9 あなたの生活環境に関することを教えてください。

n = 141

①今住んでいる家から、最寄り駅まで徒歩で何分かかりますか？	(平均 19.43) 分 (中央値 15.00) 分	na = 0.0
②今住んでいる家から、最も近いコンビニまで、徒歩で何分かかりますか？	(平均 6.43) 分 (中央値 5.00) 分	na = 0.0
③先週 1 週間で、家から最も遠い場所まで何分かかりましたか？	(平均 78.62) 分 (中央値 60.00) 分	na = 6.7
④上記③の場所は家から何kmくらい離れていますか？ わからなければ、「×」と記入してください。	(平均 55.54) km (中央値 22.00) km わからない 79.4	na = 0.0

質問は以上です、ありがとうございました。